

常葉大学短期大学部

日本語日本文学会通信

〈第 45 号〉
2022・3・15

〒四三二一八五八一
静岡市駿河区弥生町六一一
常葉大学短期大学部
日本語日本文学会
TEL 二九七一一〇〇
onodaa@tokoha-jc.ac.jp

S 筆 箱 S

思い出の古本屋のことなど

中野直樹

去年今年と、世話になった古本屋が立て続けに三軒店を閉めた。京都の丸万書店、兵庫のカラト書房、東京の大学堂書店である。私にはそれぞれの店に学生の頃の思い出がある。三つとも取り上げると紙幅が到底足りない。丸万書店の思い出を一つ。

自分が初めて古本を買ったのは丸万（マルマン）書店であった。この店は京都市の北大路大橋を駅側に渡ってすぐのところにある本屋で、店内は薄暗く奥に細く伸びており、店内中央に大きな書棚が四つほど背中合わせに配置されていた。両の壁にもずらっと棚が並んでいて、本が棚からあふれていたので実際のところの敷地面積はどれほどであったのか分からない。

それらの棚には今時売れそうもない古くて黒っぽい文学研究書などが並べてあり、中年のふっくらした店主が奥の席にのんびりと座っているそんな店であった。大学三年生の頃（2011年）に立ち寄って、『萬葉集論考』

という本を買った（2000円だったと記憶）。この本が自分にとって初めて買った古本ということになる。その後は時々寄る店になった。この店は、学生の自分にとって値段が決まらずに安くはなかった。頻繁には寄れなかった。店内が本に圧迫されて狭いので店主の目の前で買わずに出るといふことになんとも気が引けたのである。

自分は特に愛想のよい人間ではないが、丸顔なのかしてよく話しかけられる（現在はこの時よりも20kg以上太ったので丸顔に磨きがかかっている）。初めてこの店を訪れたときもやはり店主に話しかけられた。店主が言うには、文学関係の本を買ってくれる男子学生は今時珍しいとのこと。その時、自分は大学生のイメージが古いような気もしたがそんなものかとも思ってそのことに対して何も言わなかった。店主とんだかんだ話した後、これから文学を盛り上げて下さいなどと言われるちょっと困ったが、一学生にすぎない自分に

対してイッパシの編集者か研究者のように大げさに扱ってくれたのでうれしかった（残念ながら編集者にも文学研究者にもならなかった。店主よスマン）。

さて、思い出深い『萬葉集論考』であるが、それは今も私の研究室の本棚にある。この本は『萬葉集』の難訓（読みが定まらない訓）を中心に取上げた論文集で、当時の自分の学力では全てを理解することはできなかったが面白く読んだ。というより感激した。私の大学には『萬葉集』の校訂の仕事（新日本古典文学大系。緑の表紙がおなじみ）をされていた山崎福之という先生がいらして、その先生の講義に自分が出た。『萬葉集』の難訓についてはその講義で勉強していたので関心があった（講義にも出ないも自由にする先生だったが自分はその講義には熱心に出た）。

『萬葉集論考』を店で手に取ったのは、『萬葉集』に関する本だったということ、なんとなん本本の雰囲気に着かれたからで、大学に戻って詳しく読んでみると偶然手にした本が自分の関心事とびつたりはまったので余計嬉しかったのだらうと思う。こういう本に興味を持つということは、古代の文学や言語の世界が自分には開かれているのだとはっきり分かり、大げさかもしれないがもう一つ別の世界をその時持てたような気がした。

ところで、静岡市は本屋・古本屋の充実度という観点からみると結構ひどい。草薙C周辺だと瀬名に一件と草薙駅南口に一件くらいしかない。静岡市の本文化の発信は日文科が頑張らないといけない。

S 卒業生だより S

本に囲まれて

今泉穂乃美 (第四十九回卒業生)

司書の仕事がかウンターに座り本の貸出と返却を行うだけではないことは、司書を志す人であれば知っているかと思いますが。レファレンス、配架、特集コーナーの準備、修理、利用者への連絡業務、購入資料の選書、相互貸借、資料の除籍、ブックスタート、イベントの開催など……実際はかウンターの内外に係なく多くの仕事を抱えています。私もそのうちの一人です。函南町の図書館に勤めて、早いもので六年目。二年前からは寄贈資料に関する担当業務を行うようになりました。最近は新型コロナウイルスによる自粛生活の影響で皆さん自宅の片付けをしているのかもしれない。「読んでくれる人がいるなら、その方が本にも良いから」と台車に沢山の本を持ってきてくださる方が増えたように感じます。

しばらく前にも、九箱分ほどの本を寄贈していただきました。埃を払い整理をする所からと箱を覗いた先輩から「ええっ？」と驚きと笑いの声。「この箱の中、ヤモリがいるんだけど！」見るとそこには、山椒魚に砂をまぶしたような平たい爬虫類が張り付いています。ずっと本と一緒に暮らしていたのでしょうか。突然の締め出しは可哀想だったのですが、

そっと外に出されました。本の方も事務室で寄贈資料と一緒に保管しています。これらは、これから蔵書として棚に置けるよう作業するのを待機している状態です。通常業務をこなしつつの作業ペースでは増えていく速度に追いつきません。

本に囲まれて仕事するのは子どもの頃からの憧れでした。それこそ箱にいたヤモリのように常に本を傍に置きたいと思っていました。ですから図書館での毎日には満足するばかりです。ただ贅沢を言うならもう少し、もう少しだけ、寄贈資料の保管場所が増えてくれるといいのですが。事務室が圧迫され始めています。「図書館の外に寄贈資料を保管する別館を建ててもらおう」この頃担当者の間でよく口にするジョークの一つです。

努力で得たもの

高田 浩平 (第五十三回卒業生)

僕が日文科の進学を決めたのは、小説が好きだったからという理由一つです。高校では理系のコースで、最も得意な教科は数学でした。

とにかく小説が好きだったので、読むだけでは飽き足らず、自分なりに研究しながら書いていました。短大在学中もパソコン室で作品の構成を組み立てたり、実際に執筆した

りすることがありました。読書をするにも、楽しみながらも勉強の意味を持っていました。評価される物語を書くには、小説を読み込むのが唯一の方法だと思っています。

何をするにも小説のことばかりが頭にあり、暇さえあればアイディアを出す時間に充てています。

日文科を卒業した現在は、三交代制の工場で働きながら、毎日欠かさずに執筆しています。週によって寝る時間が変わるため、執筆の時間を決めず、自分の気が向いたらという意識でやっています。最近では応募の締め切りが近いので、一日1000字以上を書くように心がけています。また、締め切りに追われていない時でも、たとえ一文でも必ず書くという癖をつけました。職業柄、不規則な生活で、パソコンを開くのが辛い日もあります。それでも書き続けられるのは、小説が好きということと、明確な目標があるからに違いありません。

昨年は、江戸川乱歩賞に三作品応募しました。そこで初めて、二作品が一次選考を通過したことが何よりの喜びでした。高校三年から執筆を始めて三、四年で、やっと目に見える成果を得られたのです。この結果を出せたことで、いっそう執筆に力を入れることができました。それまでは、一日に書く分量が少なく、それこそ数行書いて終わりという日もありました。

小説家を目指し始めた時に決めたのは、どの新人賞であっても、最年少の受賞を目標にするということでした。早いもので、次回の募集が、江戸川乱歩賞を最年少で受賞することができ最後の年になります。無謀な挑戦にはなりますが、今年はいくつ作品を書きつもりで今から準備しています。自分の人生で一度、何かを得るために本気で努力してみたくないので。僕はこれまで、精一杯努力してきたと胸を張れるものがありませんでした。自分が好きなことに力を注ぎ、成果を上げることができたら、きっとこれまでに感じたことのないほどの喜びがあるはずですよ。そんな思いで、今日も書き続けます。

S 卒業研究への旅

最後までやり遂げる力

諸田 琉生（本科二年生）

私の卒業研究題目は「人を動かすスピーチの特徴―テレビドラマ「学校のカイダン」を題材に―」です。テレビドラマ「学校のカイダン」を研究対象とし、フィクションの中で扱われているスピーチや人間関係、心情などを分析し、人を動かすスピーチの特徴を探る研究を行いました。

この研究のきっかけは、一年次の専門科目

「話す技術」や「プレゼンテーション演習」でスピーチについて学んだことでした。自分が話し手としてスピーチをしていく中で、だんだんと「どうやったら相手に伝わるのだろう」「もっと心に響くスピーチがしたい」という想いを強く持つようになりました。

私が研究していく中で苦労した点は、「先行研究と照らし合わせながらの分析」です。スピーチの分析にあたり、アリストテレスの「論者の人柄、信頼（エトス）」「聞き手の状況、感情（パトス）」「論理的（ロゴス）」という三つの原則を基に研究を進めていったのですが、先行研究であるアリストテレスの「弁術論」に書かれている表現がとて難しく、読解が大変でした。その後も、自分の研究と関わりの深そうな箇所を抜き出したり、ドラマ内のスピーチの技法と比べながら読んだり、慣れない作業に悩むことも多くありました。しかし、先生にアドバイスを頂き、友達とも切磋琢磨して一緒に取り組むことで、研究を全うすることができたと思います。

私はこの研究を通し、「最後まで諦めずにやり遂げる力」がさらに身についたのではないかと感じています。このように、何か一つのものに長期間費やして作業をするという経験があまり無かったので、毎日の地道な作業の積み重ねでここまで大きな成果を残すことができてとても嬉しいです。苦労した点多かったです、何より終始楽しく研究に取り

組むことができました。自分の好きなものを題材にすることで、意欲に繋がったのではないかと思います。今回身につけた能力を、今後も様々な場面で発揮していきたいです。

卒業研究で得たもの

松下紗耶加（本科二年生）

私は「クリープハイブ尾崎世界観の歌詞表現」という題目で卒業研究を行いました。クリープハイブの楽曲のほとんどは、ギターボーカルの尾崎世界観が作詞しています。また尾崎は、音楽活動以外にも、ラジオパーソナリティーや小説家などの幅広い分野で活動しています。私は中学時代からクリープハイブの音楽を聴いていて、バンドや尾崎の活動の幅が年々広がる中で、楽曲に変化を感じていたため、バンドの歌詞変遷の歴史を問いとして研究しました。

まず、ネット上にある歌手の歌詞変遷をテーマにした論文を探し、どのような手法で研究を進めていくか考えました。研究対象のクリープハイブも、尾崎が出版した書籍が参考文献として役立つと考えていたため、対象やテーマが大きくブレることなく、題目決定まで進めました。

研究は、尾崎が作詞した三つのアルバムの中から全三六曲を対象に、KH Coderによるテキス

トマイニングの手法を用いる分析と、変遷がみられる二曲を読解考察する分析をしました。KHCoderは、担当の先生に薦めていただいた参考書を中心に使い方を一から勉強しました。アルバムごとに、単語抽出、抽出語・共起ネットワーク分析、特徴語、コーディング分析の四つのデータを得たため、複雑な使い方を理解して、データを提示する準備段階に、多くの気力と時間を費やし、結果的に、研究前に予想していた結果に近いものを提示することができました。テキストマイニングは定量的分析であり、語彙の出現回数や特徴語など歌詞特性の分析では有効でしたが、歌詞内容の理解では、予想通りのデータを得ることができませんでした。歌詞研究は、自分で読解考察をすることも重要だと思いません。

卒業研究を通して、考察力と計画性が身につきました。多くのデータを扱って、二万字程の原稿を書き上げることができたという経験を、今後の人生の糧にしていきたいです。

推しの死

杉村 未来 (本科二年生)

私の卒業研究のテーマは「物語における死の役割」。きっかけは、当時ハマっていた漫画の中で私の最推しが死んだことでした。「ど

うやって推しの死を自分の中に落とし込もうか」という思いから始まった私の研究ですが、これの進捗の遅さと言ったら。周りの人たちが次々と卒研の着地点を見つめる中、私はひとり焦っていました。テーマは決まっているのに自分が何をしたいのか分からず、調査紙を使うのは決まっているのに質問項目は具体的ににならない。それでも何とかデータを集めることが出来たのは担当してくださった先生が、質問紙の作り方を一から教えてくださり、一年二年に授業内で協力を仰いでくださったからです。質問紙の回答結果はとも面白くものでした。「いままでに何人の推しを亡くしましたか？」という質問には、20人亡くしたと答える方もいましたし(たぶん私も同じくらいです)、「推しの死に対してどんな感情を持ちましたか？」という質問では、「悲しい」や「悔しい」などマイナスな感情を持つ人が多い中、「嬉しい」や「興奮する」など人の死にあまり結びつきそうにない感情を持つ人もいました。この後、データが取れたことに満足した私は、もう卒研が終わったような気になって歩みを緩めました。今考えると提出期限一週間前に何も手がつかず切羽詰まってしまうのもこれが原因だろうなと思います。

最終的に私も周りの友達も提出期限に間に合い事なきを得ました。友達と「今何文字まで書いた!？」と叫び合ったのも今では良い思い出です(これを夏休みに言い合っていた

なら!)。何回も面談を入れたのに進行速度が遅く、たくさんの厄介事を持ち込んだのに見捨てないでくれた先生には頭上がりません。アドバイスをたくさんくれた先生方、周りで一緒に頑張ってくれた友達、アンケートに協力してくれた一年生二年生にも感謝の念でいっぱいです。なんだかんだ楽しい卒業研究でした!!

『』を読み解く

鷲山 拓朗 (本科二年生)

今回は、奈須きのこ著『空の境界』を題材に、生とは何か、死とは何かについて研究しました。好きな作品だからという単純な理由でこの作品を選びましたが、好きなものを読み込んで研究していく、ということがどれだけ大変なことなのか思い知りました。

最初私は「生と死」についてではなく、「殺人と殺戮の違い」について研究しようと考えていました。しかし、その題目では2000字辺りから何も書けなくなってしまう。一年生の時から決めていたテーマで書くことができないと気づいたときにはショックでしたが、それでも何とか「生と死」という題目に落ち着き、論文を書き上げることができました。今にして思えば登場人物の年齢を書いていなかった、もっと根拠を書き記しておく

べきだったなど、後悔はありますが、それも初めて論文を書いた初々しさということで美化して思い出しようと思いません。

『空の境界』を読み込んでいく中で感じたのは奈須きのこさんの文章表現の面白さです。これはこの人にしか表現できないよな、と思う表現がたくさんありました。「文章である」ということの利点を最大限に生かした表現に魅せられてしまい、研究どころではなくなってしまうほどでした。

何度も挫折しましたが、論文を書き上げたところにはこの作品がより好きになっていました。それに加えて何度も頭の中で考えていた生とは何か、死とは何かについて一つの指標ができたようにも思います。論文を書き上げたつもりでしたが、実際は論文というより評論に近い形になってしまいました。それでも1200字書くことができたので及第点でしょう。自分一人では絶対に書き上げることはできませんでした。協力してくださいました先生方、友人には感謝しかありません。本当にありがとうございます。



S 入賞おめでとうS

JFNラジオCMコンテスト2021

ブロック賞受賞

神谷真理子(本科二年生)

奥五澤なつき(同)

丹羽野々華(同)

「地域リファイン演習」の授業にて、私(神谷)、奥五澤、丹羽の3人チームで、JFNラジオCMコンテストに応募する作品を制作しました。テーマは大学PRということで、最初は各々で原案を考え、その中から自分たちで良いと思ったものを、授業内でプレゼンテーションしました。そこで得た意見を参考にし、添削を加え、最終的に応募したものが関東ブロック賞を受賞することができました。チーム内での話し合いや、その他の学生、先生のご意見を取り入れることで、より良いものへ着々と変化していききました。これにより、一人よりも、たくさんの人と作り上げたものの方が素晴らしい作品になる、ということを実感しました。ラジオ局で収録もさせていただき、原案を考えていた当初は、まさかここまで結果を残せるとは思いませんでした。何が起るかわからないので、何事も真剣に取り組む重要性を感じました。

(神谷 記)

『静岡市民文芸』十七号

随筆・エッセイ部門 竹千代賞受賞

水島 瑠花(本科一年生)

昨年の夏、当時の悩みであった円形脱毛症をテーマにエッセイを書きました。自身の深刻な悩みを赤裸々に描いたエッセイでしたが、前年度のエッセイ・随筆部門の受賞作のシリアスさと比べると見劣りする主題だったと感じます。それでも、こうして評価いただけたのは本当にありがたかったです。また、少しコンプレックスにも感じていた妙に堅苦しい私特有の語り口が、こうして認められたのも嬉しく思います。

余談ですが、作品タイトルの『とうひ』は、「頭皮」と「逃避」で、二重に意味がかかっています。ダブルミーニングです。収まりはいいものの、少々間の抜けた感じがして、もっとかっこいいものはなかったのか考えてしまいます。しかしながら、私が私の評価を「どこまでもいつまでもグサイ」と定めている以上、これ以外なかったのかもしれない。(水島 記)

第12回SCCしずおかコピー大賞ファイナリスト

名木すみれ(本科一年生)

私がしずおかコピー大賞に応募するきっかけ

けとなったのは、プレゼンテーション演習Ⅰの授業で行われたコピーライティング講座です。講座では、私たちが普段何気なく目に行っている短いフレーズの中にも多くの工夫が施されていることや、作者の強い思いが込められていることを知り、キャッチコピーの奥深さを感じることができました。

実際に多くの人の心に残るようなコピーを考えることは決して簡単ではありませんでしたが、言葉と真正面から向き合うことができたと感じます。句読点の有無や漢字とひらがなの使い分けなど、小さな違いが作品全体の雰囲気を変えるところはとても新鮮でした。また、共にプレゼンテーション演習Ⅰを受講しているメンバーや、他のファイナリストの方々の個性あふれる魅力的なキャッチコピーに触れ、改めて日本語の魅力を実感することができました。(名木 記)

2021年度B・Pアワード受賞

櫻田 愛香 (本科一年生)

私は、中学生時代から清水港を訪れた外国船乗客に折り紙を通じて文化を広める活動や、七夕飾りを作る活動を行ってきました。その経験から培ってきた技術を生かして、昨年度、コロナ禍において「2020年の私にできること ガールスカウトの力でコロナに負

けるな」と題したプロジェクトを企画し、新型コロナウイルス感染症対策に必要な簡易マスクを制作し、近隣団に作り方を広めて公共施設や地域の店舗に配布する活動を行いました。また、コロナ禍で対面の活動ができないからこそ、県外のガールスカウトのグループとリモートで活動することができました。自分の経験や得意なことを生かした活動を多くの人と連携して人への役立ちを実践し、地域社会で認められたことが受賞につながりました。ガールスカウトの仲間や地域の方々のご協力のおかげで、活動をすることができました。この経験からも培ったことを次の活動へと繋げ、地域の役に立てるよう励んでいきます。(櫻田 記)

県内に在住もしくは通勤・通学している人を対象としたプロ・アマの垣根を越えたキャッチコピーのコンテスト「SCCしずおかコピー大賞」(静岡コピーライターズクラブ主催)の課題「新しい『womo』の魅力を伝えるコピー」において、一年生の名木すみれさんの作品「目を離さないで。私、変わるよ。」がファイナリスト(各課題で選ばれる十人)に選ばれました。

一年生の櫻田愛香さん(ガールスカウト静岡県連盟第31団所属)が、公益社団法人ガールスカウト日本連盟より、「地域に根差した

人への貢献」が特に優れているプロジェクトを称える「2021年度B・Pアワード」を受賞しました。

櫻田さんは、昨年度、コロナ禍において「2020年の私にできること ガールスカウトの力でコロナに負けるな」と題したプロジェクトを企画し、新型コロナウイルス感染症対策に必要な簡易マスクを制作し、近隣団に作り方を広め、公共施設に配布する活動を行いました。

※B・Pとは、ガールスカウトのモットーである「そなえよつねに(Be Prepared)」の頭文字を表したものだ。

全国の学生が自身の学び舎をPRするラジオCMコピーを競う「JFNラジオCMコンテスト2021」ラジオに乗せて、学校アピールにおいて、二年の神谷真理子さん・丹羽野々華さん・與五澤なつきさんがグループで応募した「休み時間の学生同士の会話」篇(四〇秒)が、関東・甲信越・静岡エリアの応募作品の中から選ばれるブロック賞を受賞しました。

静岡市内在住または静岡市に通勤・通学している人を対象とした「静岡市市民文芸」の第十七号、随筆・エッセイ部門で、一年生の水島瑠花さんの「とうひ」が竹千代賞を受賞しました。(宮本 記)

S 学友会会長退任挨拶 S

中村 葉菜(本科二年生 学友会第三代会長)

私は今年度をもって、短大部の学友会会長を退任します。昨年度、川口結花前会長からの引き継ぎを経て、新しい学友会メンバーと一年間でやりたいことを話しました。最初に、新人生歓迎会を計画しましたがコロナウイルスの影響を受けて中止になり、その後も影響が続いたことで企画を計画することもできなくなってしまう、今年度の終わりを迎えることになりました。

来年度の学友会では、会長を中心としてメンバー全員で様々なことに挑戦してほしいです。今後コロナウイルスの影響は続くかと思いますが、オンラインを利用したり、対面の中でも可能なことを見つかりたりして、短い学生生活をより良いものにしてほしいと思います。会長という大きな役を担わせていただき、ありがとうございます。

S 「地域リファイン演習」実践報告 S

宮本 淳子

今年度の「地域リファイン演習」では、西奈生涯学習センターとの共催講座で、香水を

テーマとした「印象アップ！明日から使える香水講座」を開催した。この講座は、前期授業内でセンターの職員の方々を審査員に迎え実施した企画プレゼンテーションで選ばれた講座内容であった。

当日は、アクトインターナショナルスクール講師でアロマ調香師の永田みか様を講師に迎え、香水の歴史、香水の付け方、種類などを教えて頂いた。また、講座内の学生企画コーナーでは、実際に香水を嗅ぎながら、香りを当てつつ自分の好きな香りを見つける体験型クイズも実施された。新型コロナウイルスの感染拡大で、様々な講座がオンラインで実施されるようになったが、今回の講座は、対面ならではの良さが際立つ体験型の内容であった。

そして、この講座の準備を通じて、担当教員である私は「純粹な想いが人を動かす」ことを改めて感じた。なぜなら、前期授業で企画が採用された際、講座内容は決まっていたものの、肝心の講師は未定であったのだ。これも「香りの専門家」に人脈がない。そんな中、学生たちはインターネットで県内で香りのプロフェッショナルを育成しているスクールを探し、問い合わせフォームから、今回の企画の趣旨・内容を伝えたのである。

すると、その想いを伝えた文章に共感して下さったスクールの代表が、講師選定について快諾して下さったのだ。実はその方は日

本のみならず、世界で活躍する香りのプロフェッショナルで、おそらく私をはじめとした、いわゆる「大人」は(規定により謝礼の額も決まっているため)、依頼の第一歩を戻込みしてしまうであろう。その点、学生たちは自分たちの企画を実現させるために、素直に想いを伝えることに徹したことで、良い結果を導くことができた。この純粹な想いを丁寧に言語化できた功績も大きいと思われる。来年度からは、この点もぜひ受講生たちに伝えていきたい。

また、今年度は、草薙キャンパスを会場に日本語日本文学科主催の講座としてグラフィックレコーディングを学ぶ「絵と線で語れ！グラフィック体験講座」の企画・運営をしたメンバー、西奈生涯学習センターの広報誌の作成に取り組んだメンバーもいた。3つのプロジェクトが同時に進行したことで、例年以上に履修生には自主性が求められたはずだ。物事に主体的に取り組む姿勢を育むことは「地域リファイン演習」の目的でもある。

これからのキャリア形成において、主体性は不可欠な要素である。社会人になってからも基礎となる学びを、これからも地域リファイン演習では意識していこうと思う。

S 短信 S

▼小野田貴夫 ご迷惑とご心配をとおかけして、発見と気付きもあって、確信も得られためまぐるしい一年でした。研究と教育に活かしていきます。

▼勝山博子 年末に読んだ重松清の小説「星野先生の宿題」がめっぽう面白かったので、「日本文学史」の最後の授業で学生たちと読むことにした。舞台は二〇二一年五月、コロナ禍の中学二年生の教室。星野先生が「太陽系の外の宇宙人に地球人を紹介するメッセージを考えよ」という宿題を出す。生徒たちはおおいに戸惑いつつ、考え始める。主人公の「君はどう思う」という問いかけの続きを授業で考えてもらうのだ。現時点では授業が終了していないので、どんな答えが出たかはお知らせできない。果たして、日文科生はコロナ禍の地球をどのように紹介するだろうか、楽しみである。

▼瀬戸宏太 今年度から、卒業研究の提出方法を大幅に変更した。電子データのオンライン提出に限ることしたのである。これまではワープロを使う場合でも、B4の原稿用紙に手書きで清書して袋綴じにした時と同等になるよう、綴り込み表紙を使って製本してもらっていた。日文科が国文科と称していた時

代からの伝統を受け継いできたものだ。だが、気がつけば、そのような形式に馴染む研究は、ずいぶん少なくなっていた。ならば古い方法に拘泥することもない。どうせならコロナ禍にも柔軟に対応出来る様式にしたいと考えて、科に対しては我儘を言って変更させてもらった。さて、これで気分一新となったかどうか。

▼中野直樹 今年は学科で新しい雑誌『草薙論叢』を作りました。創刊に立ち会うことができ、うれしく思います。この雑誌が何年続くのか分かりませんが、日文科の学生の研究成果発表の場として、末永く続いてほしいと思います。卒業したあともきつと良い思い出になると思います。私が学生の頃は文章を雑誌に書くということはありませんでしたが、日文科は学生主体の媒体を持っており自由で羨ましく思います。学生主体の媒体を持つ機関を他にあまり知らないのですが、あるのでしょうか。もし無いのならば、それは日文科のウリの一つなのかなと思いました。

▼巻口勇一郎 わけあって絶滅しましたと言ふ本が実は生き残っていて、それが売れているようです。絶滅を逃れて生き延びてきた種族はむしろ様々な弱点を持っています。地球環境というのは結構目まぐるしく急激に変わりうるようで、その際、実はある環境での弱

点が新しい環境で生き延びるために必要な能力になるんだそうです。弱点にしかみえない特徴も、必要なことかも知れませんか。

▼宮本淳子 何でもオンラインの時代。二〇二一年、私はオンライン歯列矯正に挑戦。マウスピースを製作するために初回こそ上京したが、あとは一週間ごとに自宅で歯の状態を撮影し、ラインで送るだけ。オンラインで医師の許可をもらえば次のマウスピースに切り替え、コツコツと装着を続けること五カ月。無事、施術は終了した。費用は通常の半額以下。良い時代になったものだ。見た目は(多分)良くなったが、困ったこともある。実は矯正後、これまで通りに発音ができずに困っている音がある。周囲からは分からないと言われるが、そこはプロとして、こだわっていかねば・・・と思っている。

S 後記 S

本年も無事終了しました。静岡に来て今年でもう五年目になります。静岡の地名などがずいぶん分かるようになりました。行けるうちに県内の史跡などは一通り巡っておくつもりです。今年は葦山反射炉を狙っています。御寄稿下さった皆様誠にありがとうございました。(中野 記)